

## 愛媛県初の全国水平社支部の立ち上げに尽力した松浪彦四郎

東温市

松浪彦四郎は、明治28(1895)年、温泉郡(現東温市)に生まれた。地元の小学校卒業後、県外の中学校に進んだ。その後、福岡の国民新聞社で5年あまり記者として勤務した。大正11(1922)年、一時郷里に帰省した時、厳しい部落差別の現実に遭遇し、愛媛県で部落解放運動に身を挺する覚悟をした。

彦四郎は、部落解放運動に尽力する一方、愛媛新報の記者となり水平社運動を広く県民に知らせるために「水平運動の神髄」という記事を新聞に掲載している。その記事は、部落差別の起こり、「解放令」の意義、「全国水平社創立宣言」の解釈、水平社運動の意義などが書かれている。その中で、「全国水平社創立宣言」を、「我々の自力による覚醒<sup>かくせい</sup>」の宣言であり、「経済の自由と職業の自由を得ようとする」叫びであり、何よりも「人間礼讃<sup>らいさん</sup>の主張」であると位置付けている。



松浪彦四郎

大正12(1923)年3月、彦四郎らは、松山市を中心に水平社運動の宣伝ビラを配布するとともに、講演会を開き、水平社運動への参加を呼びかけた。その後も、徳永参二らと活発な宣伝活動を行い、多数の同志が集まるようになった。また、郷里においても自主的な部落解放を目的とする革新会を組織した。4月18日午後1時、愛媛県で最初の全国水平社支部発会式が挙行された。会場の中央には、「祝発会式」の大文字が刻まれ、門の左右には荊冠旗<sup>けいかんき</sup>がひらめき、県内各地から200人あまりの人々が参集した。発会式では、全国水平社連盟本部から次のような祝辞が寄せられた。「水平社同人諸君、我ら全国水平社同人は本日の日を待っていた。懐かしい諸君と真実の暖かい握手のできる日を待っていた。水平社同人諸君、全国水平社同人は今や諸君と堅い堅い握手のできたことを喜ぶ。これからどんな事があっても正しい輝かしい人間の社会がこの地上に現出されるまでお互いにこの手を離すまい。人間が人間を侮辱<sup>べっし</sup>し、蔑視し、圧倒し迫害する、この社会の過誤<sup>かご</sup>が正されるまで我らはこの手を離すまい。(中略)我らは諸君と声を合わせて今日の日を讃歎<sup>さんたん</sup>する。人間に光りあれ、人の世に熱あれ」。当時の愛媛新報には、「感激のうちに会は開かれ、多数の会員、相擁<sup>あいよう</sup>せんばかりに血と涙の話が続けられた」と書かれている。この日以降、水平社運動の烽火<sup>のろし</sup>は社会の各方面に反響を及ぼし、県内各地に水平社支部が設置され、水平社運動の広まりがみられた。

このように水平社運動が広まるなか、大正13(1924)年9月20日、全四国水平社大会が松山市で開催された。彦四郎も県代表として徳永参二とともに参画し、盛会のうちに大会を終えた。彦四郎は、多くの仲間と共に全国水平社支部を立ち上げ、差別解消に尽力するなど、初期の愛媛県の水平社運動をリードした。

[参考資料]

秋定嘉和・朝治武 『近代日本と水平社』

愛媛県人権教育協議会 『愛媛の部落解放史』